

# Fire in Modern Lifestyles

特集 「火」のある暮らしの現在

## ● 「火」のある生活展望

私が手がけた "火" のある住宅

命を支えた薪

日本の住宅におけるガス設備の発達と住生活の変化

灯りとしての「火」

炭火と炭火料理の魅力について

火が料理をおいしくする

子供のための焚火のある生活

炎に向き合い、自らの魂を知る

豊かな英国式暮らしに欠かせない暖炉の魅力

火のある暮らしの効用研究

片倉 隆幸

相沢 韶男

江面 嗣人

乾 正雄

長田 吉洋

平松 洋子

前田 朋英

茂木 健一郎

井形 慶子

松波 晴人



# 私が手がけた”火“のある住宅

片倉 隆幸

Written by Takayuki Katakura

## 人気のある暖炉やストーブ

日本の囲炉裏や西欧の暖炉に見られるように、直接木や石炭を燃やして暖をとる方法は、我々の生活の中で長く親しまれてきました。

人間にとって燃える火は、単に光や熱を提供してくれるというだけでなく、人間の心にくつろぎや安らぎを与え、生きていく喜びも与えてくれます。

日本の純粹な囲炉裏は、一部の民家再生などの事例を残し、ほとんど姿を消していますが、現代の住まいにおいては、暖炉やストーブの人気は高く、現在も火のある生活が、家族の対話の中心にあることが解ります。

現代の建築における暖炉には、巨匠建築家フランク・ロイド・ライト（<sup>1</sup>）が与えた影響が顕著です。ライトの暖炉は生活的にも構造的にも家

の中心をなすものでした。

二十世紀の最も有名な住宅の一つ「落水荘」(アメリカ・ペンシルバニア州)では、依頼主エドワード・カウフマンが、「この滝で一番気に入っている場所は？」とライトに問われて示した二つの岩を、ライトはそのまま暖炉前の団欒スペースに用いました。この住まいは、滝や岩など自然の姿を巧みに取り入れ、見事に調和させています。暖炉こそ、生活そして場の特性を象徴しているのです。

## ”火“のある住まいづくりの楽しさ

暖炉についての知識は、すでに多くの先輩方や専門家が紹介をしています。ただし、暖炉は燃焼装置としての機能をきちんと果たしていることが大事なのですが、生活の中で生きたものとして復活していくことがより重要でしょう

し、僕も住まいの設計を通してその可能性を探っている最中です。

その中から実例を通して”火“のある住まいづくりの楽しさを振り返ってみたいと思います。

長野県茅野市、彫刻家である故矢崎虎夫先生のご家族の別荘を建てた時に、初めて輸入暖炉のポータブル火（オランダ製）を使用しました。東側に八ヶ岳が見える景観のよい住まいであり、この自然の美しさに調和させることを基調としました。景観のよい方向に居間、食堂、キッチンを配し、内装はふんだんに無垢板を使用した吹きぬけ空間ですが、その中心に暖炉を設けています。暖炉を置く時に、後壁のモルタルの塗り方、レンガタイルの種類により雰囲気を増し大変豊かな空間を生み出すことができました。この暖炉は足もとがすっきり、くびれていてなんとも気持ちのよいカタチで、好きな暖炉の一つです。暖炉の火を囲みながらも視線は八ヶ岳を望むことができる、とても気持ちよい空間が

実現しています。僕は常に動物たちが森の中  
でくろくように自然な雰囲気、火があるこ  
とが望ましいと考えていますので、内部空間に  
木やモルタル、レンガの素材を用いることは、よ  
り効果的だと思います。」「月刊New HOUSE」  
九三・〇三掲載。

しかしながら、暖炉本体は、その当時でも三  
〇万円で購入できたのですが、煙突が七〇万円  
くらいと高く、今でも高い！、「これでは一般的  
な施主には手の届かないものとなるという寂し  
さがありました。だから僕は、「それなら」と思  
い、暖炉を設計することにしたのです。

茅野市の宮川に妹夫婦の家を設計した時に  
暖炉を作成しました。たまたま父が鉄工所を  
経営していたこともあり、値段も手頃なものが  
できました。ファイヤースクリーン、ファイヤード  
ッグ、シャルルにほつき、火かき棒まで設計して随  
分味のあるものになりました。ちなみに、手前  
のフードは二重にしておく安心です。

コンクリートの後壁に鉄板フードをかぶせた  
基本形ですが、炉の後壁の前への傾斜を熟慮し  
て、炎を前に引き出す工夫をしたり、部屋の大  
きさに対してあまり大きい暖炉を作ったりする  
と換気口を起すので注意しました。漆喰塗  
りのドイツ壁、暖炉そばにはスタンド型の照明と  
雰囲気もよくなり、楽しいクリスマスを迎えるこ  
とができました。

ところが「事件！」です。たまに小鳥が舞い込  
んでくるのです。煙突には比較的目の荒いメッシ  
ュが必要で、細か過ぎるとタールがたまって燃  
えにくくなります。たまには、屋根に登って煙突

周りをチェックしなくてはなりません。」「月刊  
New HOUSE」九三・〇六掲載。

暖炉を設計していると見えてくるものがあり  
ます。暖炉を作成してきたオーソリティーの先  
生方は当然おっしゃいますが、燃える炎の見え  
方が気になるようになるのです。座る位置によ  
り、また炎の高さにより、見ていて受ける気持  
ちよさが違うのです。やってみて解るといのが  
正直なところ。

ある改修の工事の際ですが、台所と食堂が一  
体となった家族室を、米松を主体とした内装に  
して、くろくぎの空間として暖炉を設け、火の見  
える位置を御影石で一段高くしたのは成功で  
した。この時は煙道を室内に見せないように屋  
外に露出させました。煙道の煙の引きが心配で  
したが、うまくいきました。煙道が消え、後壁が  
タイルだと、また雰囲気のよいものです。大工さ  
んのお宅だから薪はたくさんあります。ただ、  
針葉樹はパチパチと火がはねるので、最初の着  
火に使用するのはよいのですが、その後は硬木  
を使うのがよいと思います。タールや煤を少な  
くするように薪は十分自然乾燥させたいもの  
です。」「月刊New HOUSE」九三・〇九掲載。

私が設計した暖炉や  
ストーブがある住まい

吹きぬけを中心にした単純明快なプランと  
構造で心地よい空間をつくるということ。口

「ノストの住まいを設計しました。プランは南北  
に長い長方形、これを三分割する単純なプラン  
です。中心となるのは、吹きぬけとなる大きな  
居間、さらに居間壁面に備えつけられたオリジ  
ナル暖炉が核になっています。中央の居間の両  
側には、和室と水周りが配され、二階部分には  
寝室と予備室があり、吹きぬけには階段、ブリッ  
ジ、暖炉があります。ブリッジから暖炉を眺める  
のは楽しいものです。

自分で設計し始めてから、比較的手頃な価  
格で実現できるようになりました。設計に当た  
って重要なことは、新鮮な空気の取り入れ口で  
す。比較的安価ですみ、なおかつ心地よいしく  
みを考えていくのに苦労しているわけですが、  
この物件では、あまりめだたないところに既製  
の換気口を設けました。

ただし外気を直接入れると不快ですので、  
注意する必要があります。口「ノストにするに  
は施主の覚悟が重要ですが、安いということだ  
けでなく、満足できる家にならないといけない  
からです。」「月刊New HOUSE」九六・〇六掲載。

### S 邸

周囲に豊かな自然が残る穏やかな住宅地の  
「S邸」。敷地も一六六坪と広く、「ここに三世代  
の住まつ家を設計しました。」「生活しやすいこ  
とと遊び心のある家」ということで、この要望に  
応えるために囲炉裏を取り入れてみました。  
家族が一緒にいろんな話をするところ、それは  
食卓です。食卓こそ団樂の場であり、その場の  
延長に昔ながらの囲炉裏を取り入れることに  
より、世代を超えたコミュニケーションの場とし

て新しい食空間を提案してみました。バーベキュー、鍋物と、家族全員で楽しむことができます。家の中心に食堂と囲炉裏の間を配し、それを取り囲むかたちで各部屋があります。囲炉裏端は、友達や近所の方との語らひの場としても有効。特にシロコファンで穏やかに換気しています(「月刊New HOUSE」九八・〇二掲載)。

K邸

南欧スタイル独特の明るい雰囲気、K邸」。避暑地としては、夏には心地よい風が吹き、とても過ごしやすいのですが、冬はマイナス〇度以下になる厳寒の地であり、寒さ対策を十分クリアした上で、開放感が欲しいと思いました。断熱蓄熱、暖房方法などをきちんと研究することはいつものことです。無垢の木、テラコッタイルタナクリームの壁(雑誌に掲載後いろいろな方がこの壁を使用することになりました)といった自然素材を蓄熱媒体とすることは、今も僕の事務所の基本的な設計手法となっています。火を使用する暖炉は、忙しい時には薪をくべるのが手間なので、輻射式のパネルヒーターならば不快感がなく、換気を行いながら蓄熱すると効果的。ということ、最近では暖炉を設計しても、これを常時の暖房として使うことも多くあります。この家で設計した暖炉は、コンクリート袖壁の上にフードを置いた基本的なかたちで、開口部の大きさをいくぶん小さくして、品よくなりました。よく燃えるのももちろん、二階建てなので煙道もうまく立ち上げることができ、室内の暖房に使用しています(「新しい住まいの設計」九八・一一掲載)。

古民家の再生

信州に住んでいると、古い民家の再生も多く見られます。現代の生活もあり、僕自身は古い建築をそのまま再生することは、あまり好きではありませんが、築三〇〇年の民家の修景をすることにしました。伝統ある木造民家にモダンな鉄筋コンクリート打ち放しを繋げ、歴史ある民家との調和を狙いました。

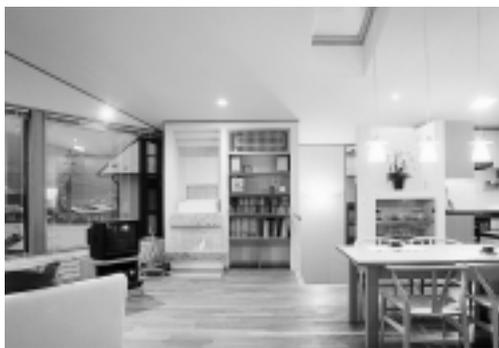
内装には無垢のフロリングや珪藻土漆喰植物性塗料といった自然素材を使用しました。特に本格的に壁に埋め込んだ暖炉は品よく仕上がり、中庭を暖炉の両側から望める、気持ちのよい住まいとなりました。一九三〇年代のヨーロッパのモダンズムを考えると、コルビジエ、この椅子や照明器具を採用したことで独特の雰囲気を出すこ

とに成功しながらも機能的な住まいになりました。暖炉用品はいつものように作成していますが、今回バーベキューセットも設計してみました。特に埋め込み暖炉の場合には、新鮮空気の



清水の家

写真◎林安直



城山の家

写真◎林安直



宗賀の家

写真◎林安直



300年の民家の修景 歴史と現代の接点に建つ家

写真◎ウィルビー

取り入れを後壁に設け、空気を暖めてから室内に引っぱるようにしました。また煙道が囲われているのですが、見えない部分は暖炉設計者として大変気になるところですので、室内へうまく排熱できるように工夫しました。毎回見えない熱には苦勞するのですが、完成してチロチロと燃える火を楽しむ喜びがあります。だからチャンスがあれば今後も創り続けていきます。この住まいは民家を基調にしなが、どうすれば現代的に快適に過ごすことができるかを追求した住まいです(「月刊New HOUSE」九九・〇二掲載)。

薪ストーブを取り入れた住まい

また、「月刊New HOUSE」〇二・〇一掲載の「高遠の家」、「清水の家」、「長畝の家」、「米沢の家」など、ストーブを使用した住まいも設計しました。特に「月刊New HOUSE」〇三・一二掲載の「高森の家」は、奥さまがテレビ番組「大草原の小さな家」に憧れていたこともあり、ストーブは料理にしっかりと利用されています。おでんにカレーにシチュー、朝は味噌汁とワル活動です。ストーブは、「米沢の家」でも使用しましたが、アメリカパーモントキャスティング社製の「アンコール」です。薪ストーブらしい風格溢れるスタイルです。刻々と移ろうアルプスを眺めながら、身体を暖め、料理を味わい、家族がひとつの場所で語り合つ。火を生活の場に取り戻した、本来の使用方法と思います。また喘息がちなお子さんには、大なべからいつも蒸気があり、乾燥しやすい冬の室内に、適度な湿気をもたらしてくれます。

## 暖炉を自然な形で 住まいに取り入れる

暖炉の話に戻りますが、回を重ねてくると、暖炉と家具の関係に非常に神経がいくようになりま。宗賀の家(「リビング信州」二〇〇四掲載)は、家族の団欒、友人を招いてのパーティー、趣味のピアノを楽しむスペースなど、いろいろな用途に使用しているラウンジに暖炉を置き、大谷石で水平に延びるデザインと周囲のベンチチェアを収納機能としても活用し、壁にはソチ、トップライトからはスリット状の光を取り込む美しい空間となりました。夏涼しく、冬暖かく、快適で、高齢の両親も昨冬は風邪をひかなかつたとか。

松本市の「城山の家」(「新しい住まいの設計」

〇三・一〇掲載)は、暖炉を家具のように見せたいと思い設計しました。伸びやかな二階オープンリビング。大きな屋根に抱かれたワンルームには、視線をさえぎる柱もなく、しつらえはシックでソフト。暖炉とソチと棚が豊かなインテリアとなりました。煙道を外に出してあることで、また、室内の珪藻塗リ壁と同色の仕上げにすることで家具風な暖炉になりました。室内もYチェアやアアルト(3)の椅子が置かれ居心地のよい住まいになっています。

家具風にして居間からの視線をうまく抜くことも考えました。「大町の家」(信州の情報誌「クラ」〇五・一月号掲載)は、そんな関係も表現しています。

まだまだ書きたいことがあります。原稿も終わりに近づきました。暖炉と居間の関係を再考して、今の時代に失われつつある家族のしっかりした関係を呼び戻していきたいと思ひます。新作の「光を繋ぐ家」の一段下がったヒット風の暖炉コーナーや、「丘水庵」という住まいの大谷石のびやかな暖炉、「駒ヶ根の家」の家具風暖炉など、日本建築家協会のホームページ、今月の建もの」に掲載中です。また機会があればぜひ僕の本ホームページを訪れて、豊かな暮らしの雰囲気味わってみていただけたら幸いです。

CEL

(1)ラング・ロイド・ライト(一八六七―一九五九)アメリカの建築家で、近代建築の四大巨匠の一人とも呼ばれる。日本での作品では、旧帝国ホテルの設計が特に有名。

(2)ル・コルビジエ(一八七五―一九六五)スイスの建築家。「家は生活のための機械だ」と主張し、住宅を中心とする近代建築の傑作を生み出した。また家具などの設計も数多く手がけている。

(3)アルヴァ・アアルト(一八九一―一九七六)フィンランドの建築家であり工芸家。建築物の設計だけでなく、多くの家具や工芸品の傑作デザインを世に残した。

■片倉 隆幸(かたくら たかゆき)

建築家、信州大学工学部社会開発工学科建築コース非常勤講師、日建学院松本校講師。一九五六年長野県生まれ。八三年芝浦工業大学大学院修了。八七年に片倉隆幸建築研究室を設立。九九―二〇〇三年芝浦工業大学工学部建築学科非常勤講師。九二年長野県建築文化賞奨励賞受賞、九四年長野県建築文化賞最優秀賞受賞、九八年長野県建築文化賞最優秀賞受賞、九九年日本建築学会北陸建築文化賞受賞、〇一年長野県建築文化賞最優秀賞受賞、〇二年関東甲信越建築士会ブロック創立四〇周年記念建築作品コンクール表彰など受賞多数。